



アスパラガスは、長崎県の施設園芸における基幹品目の一つです。しかしながら、株の老齢化や排水不良などの土壌環境の悪化により、10㎡当たり収量が伸び悩んでいます。また、生産者の高齢化が進む中、日々の収穫作業などの労働負担が大きいことから、生産者数や作付面積は減少傾向にあります。

そこで、香川県で開発された「桙板式高畝栽培」(以下、高畝栽培)について、本県の主要品種「ウェルカム」と有望品種「ゼンユウガリバー」を用いて、

半促成長期取りアスパラ 「桙板式高畝栽培」導入効果

労働負荷軽減、増収を両立

栽培方法と品種の違いによる可販収量と可販収穫本数および可販1茎重(収穫3年目)

栽培方法	品種	可販収量*(kg/a)	可販収穫本数(1000本/a)	可販1茎重(g)
高畝	ウェルカム	239(154)**	15.3(142)	15.6(109)
	ゼンユウガリバー	331(129)	19.8(129)	16.7(101)
平畝	ウェルカム	155	10.7	14.2
	ゼンユウガリバー	255	15.3	16.5

* 可販収量：JA全農ながさき出荷規格(若茎を26cmに調整)に準ずる秀品収量および優品収量の合計
** かつこ内の数値は平畝栽培を100とした場合の収量、収穫本数、1茎重割合

本県の栽培条件下における収量性、収穫時の労働負荷

と土壌の排水性を検討しました。

その結果、収穫3年目における高畝栽培の収量は、慣行の平畝栽培と比較して、「ウェルカム」で54%、「ゼンユウガリバー」で29%多くなり、販売額から物財費を引いた金額は「ゼンユウガリバー」の場合、高畝栽培が平畝栽培より7万6000円/㎡増加しました。また、収穫時に腰や膝を深く曲げる姿勢の回数が減ることで労働負荷が軽減され、さらに、土壌の排水性についても改善効果が認められました。

以上のように、アスパラガスの高畝栽培は労働負荷の軽減と増収を両立できる技術であり、平畝栽培より収量と所得の向上が期待されます。

(長崎県農林技術開発センター 農産園芸研究部門 野菜研究室 研究員 石橋康樹)